

「寅年から寅年へ」

7 地区 吉田 健太郎

私は 1997 年（丑年）に開業しましたが、開業当初はレントゲンを買う余裕もなく、当時日本一安い？渋谷区医師会の入会金も後回しになり、医師会への入会は、翌年 1998 年（寅年）に持ち越されました。従って寅年～寅年（2010 年）まで 12 年間渋谷区医師会員として末席を穢させて頂いていることとなります。

私は開業当初から地域医療を目指すというよりは、漢方を主に現代医学では治しづら^{いわゆる}い疾患を持つ患者さん（所謂医療難民）を看させて頂こうと考えておりました。

ところが当時漢方は現在ほどなじみが無く、又毎年のように漢方薬の保険外しが叫ばれ、先行き不透明な点も多くありました。

しかし数年経つと漢方の保険外しを画策していた役人が汚職で逮捕され、その後しばらく静かになりました。最近「事業仕分け」なるところでこの話題が復活したことは、嘆かわしいことです。

この 12 年間はツムラ・クラシエのエキス剤を主に使い、加えて胎盤製剤を活用して、かなりの手応えを感じてきました。

胎盤製剤とはマイナーな存在ですので補足説明させていただきますと、人間もしくは動物の胎盤を原料とした医薬品で、内服薬の「ビタエックス」注射薬の「メルスモン」「ラエンネック」が医薬品として認可されております。

私のクリニックは、開業以来胎盤製剤と共に歩んできたといっても過言ではなく、多くの患者さんに愛されております。

そこで、この胎盤製剤の開発者を紹介させて頂こうと思います。年代の古い順から述べると、太平洋戦争中（1943 年）に文部省の命令「国民の栄養不良を改善せよ」との結果誕生した「ビタエックス」は、京都大学産婦人科三林隆吉教授がつくられました。三林教授については渋谷区医師会の中島文夫先生が平成 16 年 9 月の医師会報に「すごかった産婦人科教授」と題して書かれておりますので、ここでは、メルスモン製薬創業期の社長久保全雄医師とラエンネック注射薬開発者の久留米大学医学部病理学教授稗田憲太郎氏の破天荒かつ波乱万丈であった生涯について紹介させて頂きたいと思いません。

この二人の先達は、医師としても卓越した予防及び治療の実績を残されましたが、加えて両先生とも共通してヒューマニズムに溢れ、人間の器が大きく、破天荒な面もあり、私は医師として両先生の考え方を日々の診察の拠りどころとしているだけでなく、人生の師として尊敬しております。

◆久保全雄医師のこと（敬称略）

1911 年久保全雄は東京本郷に生まれた。

父秀造は新橋演舞場等を経営する実業家であり、秀才肌の全雄の兄秀雄は医者にして、弟の全雄は実業家にしたかったそうである。父の意に反して全雄は兄の後を追うように日本医大に入学し、1936年卒業した。太平洋戦争中はシンガポールで軍医として働いていたが、1943年731部隊の石井四郎中将がシンガポールに来た時彼と衝突し、内地に帰ることになった。

《 久保全雄ブローカーとなる 》

戦後一時厚生省の技官となったが、家庭内での係争が原因で退官した。その後しばらくは古タイヤや自転車のチューブを安く仕入れて売ったり、壊れたラジオ等の修理をして再生し売りつけるという闇ブローカーの仕事をしてかなり儲けた様である。良家育ちの坊ちゃんが医者くずれのブローカーになったわけだが、電気系統に詳しく、その方面でも才能はあったようである。

《 診療所開設 》

1948年彼はその資金を元に北千住に久保診療所を開業した。

「久保全雄医師風雲伝」増田敏和著には開業当時の様子が描かれている。

『ある時やくざが来ましてね。キュッと腕まくりして^{あいくち}七首をポンと机に立てて、「三週間要治療の診断書を書け」というのです。

しかし僕がその^{あいくち}七首を取ってポンと床に投げたんです。

「そんな七首なんか見せつけても脅かされるような医者じゃない。もう一回出直して考えて来い。」と言ったんです。

そしたら「覚えてろ」と捨てゼリフを言って帰りましたがね。

そのやくざが1ヶ月くらいたって奥さんを連れて来たわけです。

「この年齢まで医者脅かして、言うことを聞かない医者というのはいなかった」と言うのです。

「よし、ああいう変わった医者なら、俺みたいな人間でもこっちが頼めばちゃんと治療してくれるかも知れない。」

ところが自分だけじゃ来られないから、奥さんと来たと言うのです。

「梅毒を治してくれ」と。

「ああそれは治してやる」と言って、そのかわり「ここに来る時には子分を連れてこないで一人で来なさい」とか、「やくざの足を洗いなさい」とか、いろんな条件をつけましてね。

それからビール瓶を持ってきたのです。中身は何だというとウォッカなのです。どうやら密造酒をどこかで手に入れてきて飲ませてくれるのですね。……』

こうして彼が開いた診療所は、すぐに患者が殺到したようであったが、やくざや花柳界の女性が多く、8ヶ月後にきっぱりと閉鎖している。

1950年彼は民医連運動に参加し、3月池上診療所を開設し所長に就任した。

その後久保全雄は新日本医師協会での多面的活動、ビキニ水爆被害の調査、新潟水俣病闘争など多彩な活躍があり、その一つ一つにヒューマニズムに溢れた医師像が伝わってくるが、その中でも特筆すべきは、ポリオ根絶のために母親を主とする市民を巻き込

んだ闘争であった。

《 ポリオ闘争 》

1959年青森県八戸にポリオの集団発生が突然起こり、その後全国に広がり世の子供を持つ母親達をふるえ上がらせた。当時我が国ではポリオの予防にはアメリカから輸入できるソークワクチンが少量あるだけで日本での製造はされていなかった。

1960年ポリオ最大の流行年となり全国の発生数5106人（死者128人）となった。

この年、久保全雄はソ連の生ワクチンの存在を知る事になり、ソ連・中国を回って勉強し、帰国後「小児マヒ」を発刊、緊急にソ連から生ワクチンを輸入し集団接種するよう呼びかけた。この「小児マヒ」は発刊とともに爆発的に売れ、特に全国の母親に広く読まれた。

厚生省は当初、国交のないソ連からの輸入を拒絶。アメリカからソークワクチンを大量に輸入しようとした。しかしソークワクチンは3回の注射が必要で効果は6～8ヶ月後くらい待つ必要があった。

一方ソ連製生ワクチンは1回の経口投与で済み、効果の発現も1～2週間ということ、アメリカ製に比べその優位性は明らかであり、ソ連ではアメリカ製ソークワクチンは当時過去のものとなっていた。そして多くの関係者の努力によりソ連はこのワクチンを無償で大量に日本に提供する事を約束した。しかも同時期アメリカ本国でもポリオの流行がありアメリカ国内向けだけで生産が間に合わず、日本に大量のアメリカ製ワクチンを供給する余裕は無かった。

にも拘らず厚生省はソ連と国交が無いことに加え、既存の製薬会社の利益を保護する目的もあったようで、送られてきたワクチンに高い通関料や検定料を掛ける等の妨害をし、アメリカも急遽期限切れ寸前のワクチンを送りつけてきたりした。

一向に決断しない厚生省の態度に業をにやし、久保全雄は自分の診療所を閉鎖すると、全国を歩き廻りながら講演し、署名を集め、ポリオ闘争を国民的運動に発展させていった。

この年12月久保全雄は各地で盛り上がった運動を統一し、元首相石橋湛山を会長に、鳩山薫子（日ソ婦人懇談会・現内閣総理大臣鳩山由紀夫氏祖母）太田薫（総評）らが小児マヒ中央協議会を組織した。

1961年ポリオ闘争の中心は、子を持つ母親達であった。全国で母親中心の行政への陳請やデモが相次ぎその波は厚生省や厚生大臣にまで及んだ。

先日NHKのBS放送で1961年の出来事を紹介する番組が放映されこの時の様子を偶然にも知ることが出来た。

時の厚生大臣古井喜美に陳情にきた主婦が久保の書いた「小児マヒ」を見せ

「大臣この本、読んでおられますか」

大臣 「いやまだです」

主婦 「私たちですらこんなに勉強しているのに、大臣がお読みになっていない

とは」

大臣 「それを貸してくれませんか」

主婦 「私たちは買って読んでいるのです。国を預かる人が、他人の本を借りて読むとは。買って下さい」

大臣 「買って勉強し、私の見解をまとめておきます。近いうちにまたお会いしましょう。」

二度目に会った時古井大臣はこう述べた。

「あのご本、全部読みました。自分はこの本に全面的に賛成です。法律上ないものを実施するのは大臣としての責任ですけれども、しかし今の日本の厚生官僚や学者の消極性の中では、政治判断しかないんです。その政治判断に関しては、私に任せて下さい。」

こうして母親を中心とした国民運動は厚生大臣を動かし、政治の壁を破って、1961年7月20日よりソ連製生ワクチンの投与が始まった。

1年の半分以上が過ぎた7月からの投与であったが、この年のポリオ発生は前年5106名の半分に減り2436名、翌年は289名、1963年は131名と激減し、以後ほとんどみられなくなった。

世界の防疫史上にも例が少ない見事な成果と言えるが、この大事業が政府主導ではなく、久保全雄という一開業医らが呼び掛け、母親中心の国民運動に発展したことにより成し得たということの評価したい。

《 メルスモン製薬設立と再建 》

久保全雄はその後多方面に活動されていたが、メルスモン製薬の1950年代創立と社長就任、その後一時彼の他の活動が忙しく名前だけの時もあったが、1980年代メルスモン製薬の経営が傾くとすぐに復帰し、経営立て直しに尽力され、1989年77歳で生涯を閉じられている。

現在私のクリニックでは、メルスモン注射薬は他の注射薬を

周回遅れで引き離すくらい沢山使われ、多くの患者さんを助け、支持されている。

そして久保先生から受け継いだものは、この注射薬だけに終わらず。久保先生が自分の診療所を飛び出し、患者や大衆の中に自らを投げ走り回る行動力と、底に流れる精神を、日々の診療の糧としている。



厚生省に抗議する母親達



久保全雄先生

◆稗田憲太郎満州医大・久留米医大教授の波乱万丈な生涯（一部敬称略）

稗田憲太郎は1899年長崎県壱岐に生まれ、生家は島の玩具店を営んでいた。1920年南満医学堂（後の満州医科大学）を卒業すると、大野章三教授（後の九州。

帝大教授)の病理学教室に進み、肝臓を中心とした研究を精力的に行なった。

九大や Johns Hopkins 大学(米国)に留学後 1932 年 33 才の若さで満州医大の教授に就任した。

稗田教授は、徹底した現場主義を貫き、病気が流行するとすぐ現地に向かい、病理標本を集めてはその成果をほぼ同時進行で学生に講義した。当時の満州は、日本の植民地であり、文明国では既に過去のものとなった風土病や、地方病、公害が豊富に現存したため、内地では教科書でしか確認出来ない事実を、生き生きとした実話として話され、作ったばかりの新鮮な標本を見せることが出来た為、教授の授業は大変人気があった。

又次のようなエピソードもある。

恋愛中の二人の学生がしばしば北京に出掛け大学に来ない為、この二人を退学にさせようと、教授会が開かれた時があった。この時稗田教授は他の教授に向かって「諸君は彼らの年齢の時に恋愛したことがありますか。私は実はあります。恋愛は学校より楽しいから、学校が面白くないと学校に行く気になりません。彼らが学校に出ないのは学校が面白くないことにも部分的責任はあるから教授会も責任から逃れ得ない。私は学生を処分しない方針ですから、これからも御承知下さい」と話し、学生を救った。

またある時、彼の時計とパーカーの万年筆を盗んだ学生がいた。

その時教授は

「彼が必要としたから持って行ったのだろう。品物は誰かの役に立てば、それで良い。しかし将来のある彼がどこかで反省し、新中国の青年として正しい目標を得るようになることを願うのみだ」といって追求しなかった。

この様な人柄からか、稗田教授は学生のみならず、同僚や職員からも人気があり、日本人からも中国人からも慕われた。

満州医大では、良き同僚や学生、共同研究者に恵まれ大変充実した時代であったと彼は述べているが、この時代に Kala - Azar の研究で宮入賞、アメーバ赤痢の研究で桂田賞を内地の研究者をおしのけて受賞している。

ところが 1945 年 4 月日本軍の敗色濃厚となった時期に突如熱愛していた満州医大を辞し、張家口にある中央医学院長に赴任した。

満州医大が軍事一色に変化し、学長を始め全職員、全学生が大学教育の場ということのを忘れ、軍人の真似事を始めたことに嫌気がさして飛び出したわけだが、後に無謀な行動であったかもしれないと回想している。

1945 年 8 月稗田教授は張家口で終戦を迎える。教授は中央医学院の日本人従業員を苦勞して天津まで送り込み、その後、人一倍愛し続けた祖国を失った精神的ショックから



満州医大の稗田教授

汎腹膜炎症状だった為、サルファ剤の注射により数日で治し（当時は抗生物質が出現せず、サルファ剤が姿を見せ始めていた頃であった為、薬の厄介になったことのない人には著効した）

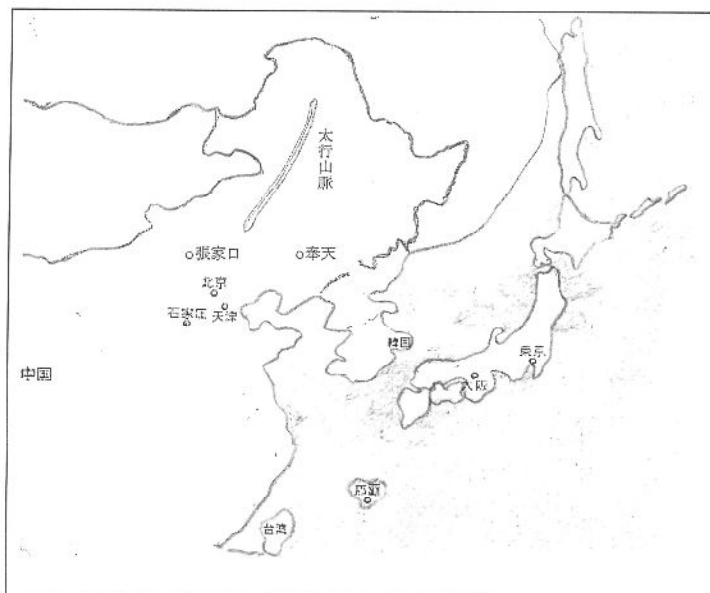
「これまで子供を生んでかよようになった女は全部死んだが、八路軍の中にいる日本人は偉い医者だ」とか評判になった。

医科大学といっても青空教室で、稗田教授以外には原稿無しに講義できる人材がなく専門の病理学のほかに組織学、寄生虫学等も教えた。部落から部落へ移動する時、甲状腺腫地帯や発疹チフス流行地を通ると、教授は感染経路原因予防などについて講義し、病気の人物と人民の惨状を眼前にしての話しであったため、語る方も聞く方も真剣勝負、をしているような講義だった。

稗田教授は太行山脈の電気もない部落を転々とし、葛公という部落に住みつき 4 年を過ごすことになる。ここで医学生を教える傍ら、学生と農作業を手伝ったり衛生知識のアドバイスをしたりすっかり住民に溶け込んだ生活をおくった。



八路軍時代の稗田教授



《 運命を変えたスプリンスキー著「神経病理学」との出会い 》

この時代専門分野の書物のみならず、歴史や社会科学人文科学の本やマルクス・エンゲルス・毛沢東等の思想書もむさぼるように読破した。この時接した書物の中にソ連の病理学者スプリンスキーの書いた「神経病理学」があり、この本との出会いが後の稗田教授の運命を変えることになる。スプリンスキーの著書には「冷蔵胎盤の皮下埋没によって痕瘍収縮は治る」との記載があったのである。稗田教授は自分の全く知らなかったことが書いてあったため飛び上がるほど驚いた。

しかし、太行山脈の山奥にいたため、研究を深める条件がそろっていなかった。

やがて、毛沢東の戦略により八路軍は国民党軍を徐々に押し返し、稗田教授の一行も石家荘市に入り 5 年振りに電燈の光を見た。

ついで大学は天津に移転し、研究条件もそろってきたのでスプリンスキーの記述

を実験して正しいことを確認した。自分の知らないことは知らないとし、謙虚に知らないことを確かめる稗田教授の医学研究の基本姿勢である。(私も稗田先生の言葉「知らざるを否定せず、知らざるに学ぶ」を座右の銘としている。)そしてさらに教授は「瘢痕収縮は人体の表面に起こる外傷であるから、これが体内で起こった場合には同じ治療法が可能ではないか」と考え、自分の専門分野である肝硬変の患者への適用を考えた。実際に腹水の貯まっている患者に胎盤埋没療治療を数回施すと腹水は消え、患者は元気になった。

中国本土が解放され、教授は1953年前述の林考之輔らとともに日本に帰国した。

後に林考之輔は鍼灸師の資格を持っていた為、稗田教授が株式会社ラエンネックを新橋に設立された時、隣接する建物で、その資格と胎盤漿を使って、夜尿症と色盲治療にあたった。大病院からも紹介を受け、治しづらい病気にも成果をあげたようである。

《 8年ぶりの帰国 久留米大学教授に就任 》

稗田憲太郎は8年ぶりに日本の地を踏むと、その年、久留米大学病理学教授に就任した。そして病理学教室を第一病理と第二病理に分け、第二病理において肝臓専門の胎盤療法を研究する教室にした。そこで稗田教授は胎盤療法の研究に明け暮れ、動物実験を繰り返した。翌年「久留米組織研究会」を組織すると同時に胎盤埋没療法を発展させた胎盤漿療法を開発した。埋没療法は、麻酔→皮膚切開→縫合と小外科的手技を要求されるが、注射薬(胎盤漿)にすると、簡単に扱え安全性が増すことになる。

「久留米組織再生研究会」は主に開業医を中心とした臨床医の集まりだったが、稗田教授の作られた注射薬「胎盤漿」を使用し、多くの症例が集まった。

そして胎盤漿は、肝硬変に効くだけでなく、多くの疾患に何らかの効果がみられ、万病薬に近い存在となった。

稗田教授は早速注射薬を生産すべく「久留米組織再生研究所」を作った。今でいう学内発ベンチャー企業である。ここで現在使われている注射薬の「ラエンネック」の起源となる注射薬 LAENNEK HIYEDA が完成した。

そしてさらに多くの症例を集め、今から半世紀前に自信を持って「肝硬変は治る」と明言された。しかし、この発言が当時肝硬変は非可逆的疾患と思われていたため、物議をかもした様であり、稗田教授の死後、注射薬ラエンネックは他の会社の手に渡り、この注射を使う医師はほとんどいなくなってしまった。

しかし、1984年中村敏一(九大→阪大)らが発見したHGF(肝細胞増殖因子)やTGF α 、HB-EGFの発見により、肝硬変の治療の可能性を示唆する実験結果が多くの研究機関で確認されている。そして肝臓から見つかったHGFが数年後に胎盤にも多く存在することが発見された。今後胎盤製剤は新しい視点から見直されると思う。

稗田教授が①胎盤漿を開発し②「肝硬変は治る」と結論し、そして自ら組織した

③「組織再生研究会」「組織再生研究所」に再生という言葉を使い、今日の再生医療を予見したこの3点が約50年以上前という時代を余りにも早く先取りしたために時代に受け容れられなかった気がしている。

晩年稗田先生も医療の枠組みの中だけで動いていても真に良い医療を実現することは難しいと考え、国会議員に立候補したが、惜しくも次点で敗れている。

久保先生は大衆を動かしたが、稗田教授は残念ながらその点では医療の枠組みの中だけの成果に終わった。

現在でこそポピュラーになった再生医療、そして肝硬変は治ると明言した日本の医者が半世紀前にいたことを、私は多くの人々に知って頂きたいと同時に、後世に伝えていきたいと思う。

「知らざるを否定せず、知らざるに学ぶ」の言葉とともに・・・。

《 番外編 久保全雄医師 風雲伝 より

久保全雄 と 文豪 吉川英治氏 との対談 》

久保

『医師が「この病気は俺がなほしてやる」という態度、患者が「この病気はあの医者になほしてもらおうのだ」という態度ではだめなので、治療は患者と医師の相互協力のもので。医師は医学をもっているが、生命は患者のもので医師のものではない。だから健康と生命を守るということに関しては、中心は患者であって、医師はその援助者と思っていますから、私は患者に対して日ごろよくその点を話している。』

吉川

『僕が患者でああなたが主治医でしたら、きっとウマが合うでしょうな。(笑)僕は日頃、こうなんです。かりに自分の体を一国として見るんです。自分の生命に対して、僕は絶対者だ、総理の位置にあるんだという風にですね。ですから、不遜な言い方ですが、どんな名医の言でも、一國務大臣の進言か一局長の意見程度にしか、じつは聞いていないんですよ。と、いうと大へん医学を軽視するようですがそうでなく、責任の問題です。いいですか、ここは間違えないで欲しいんです、お世話になる医師を疑うのでもなく、医学への不信でもありません。唯、自分の生命の責任は自分にあるのみと信じるからです。日頃の養生法などもふくめてですね。

それともう一つの理由は、現代の医学はやはり現代の段階にとどまるもので、やたらに絶対視は出来ないのです。医学だけではなく、進歩の過程にあるはずのもので、今日から、今日の医術といえ、まだ多分に時代的な幼稚もあるものと思っていますから。』